

第27回平和祈念コンサート 講演会

【^{もとはしちよこ}本橋千代子氏】 皆さんこんにちは。本日はお招きいただきましてありがとうございます。ごぞいます。

私は本橋千代子と言います。生まれは練馬区貫井町で、今の貫井5丁目になります。

私の生家は、練馬区の伝説や昔話に出てきます「^{ぜんかい}善海さん」が立ち寄り、その後、生涯を終えたことが伝えられている家になります。今も、善海さんは庭先にまつられています。

その後、結婚しまして、現在は貫井4丁目に住んでいます。

地元では貫井町会の役員として、文化部の理事や、防災会の役員として活動しています。

昨年度に、練馬第二小学校の児童達に戦時中の話をする機会がありまして、当時小学生だったころの話をしましたところ、その後、その話をしてほしいとのお声がかかり、今日の講演になりました。

私が経験したことをお話しますので、よろしく願いいたします。

私が小学校に入学したのは戦時中の昭和16年ごろで、今の練馬第二小学校、当時は練馬第二国民学校でした。

学校の校門は、今の貫井交番がある辺りにあり、^{きやら}伽羅の木が両側にありました。今も階段の一部が残っております。

朝は用務員さんが「おはよう」と声をかけてくれました。

学校で最初に教わったのは、「さいた、さいた、桜がさいた」の時代でした。

そのころの登下校は集団ではなく、近所のお友達と誘い合って学校に行っていました。

でも、私の家には東側に大きなケヤキの木があって、落ち葉がたくさん落ちるため、広い庭をきれいに掃除しないと学校に行かせてもらえませんでした。学校に行くために、朝早くから一生懸命掃除をしました。

昭和16年12月8日の日米開戦後は、お金があっても品物がなく、衣類なども切符が無いと買えなく、食糧なども配給制度になりました。

金属も回収になり、何もない方はお鍋やお釜まで出させられました。その金属で、飛行機、軍艦、鉄砲の玉など、いろいろなものに使用されたそうです。私たちは、「欲しがりません勝つまでは」と我慢したものでした。

また、紙も不足していて、テストをするときは、先生が「一度使用した紙を家から持ってくるように」と言われて、裏の白いところに印刷してくださり、テストを受けることができました。

昭和19年になると、東京の空にも米軍のB29がやってきて、警戒警報が放送されると、防空頭巾をかぶり、空襲警報にならないうちに鞆を背負い、上級生は下級生の面倒を見ながら、急いで家に帰りました。

カバンや防空頭巾には、氏名、住所、血液型を書いて、縫い付けて背負っていました。

その昭和19年には集団疎開が始まり、昭和20年3月になると、練馬第二小学校も集団疎開に行くことになりました。疎開先は群馬県の玉屋旅館だったそうです。疎開しない方や、田舎の親戚に行った方、いろいろでしたが、学童疎開は3年生以上でした。

私はどこにも行きませんでした。なぜかと言いますと、東京が全滅するといううわさが流れていましたので、当時消防団長をしていた父が言うには、「集団疎

開に行った10歳にも満たないお前が生き残り、東京の家族が全員死んだらどうやって生きていくの、死ぬときは一緒だから、お前は疎開に行かなくていい」との一言でした。

このころには、もう昼夜を問わず空襲が始まりました。

夜、空襲が恐いので、寝るときには寝巻きなどには着替えなくて、そのまま枕元にカバン、くつ、学用品などを置いて、空襲警報が鳴ったらすぐ防空壕に持って逃げ込めるようにして寝ていました。

電灯には黒い布を被せ、光が漏れないようにしていました。

昭和20年3月10日の東京大空襲では、東の空が真っ赤ですごかったです。

私は家で留守番をしていましたが、姉たちは勤労奉仕で兵隊さんの軍服のボタン付けなどをしていたそうです。

高松には、今の練馬中学校のところに陸軍の電信学校があり、東側には高射砲陣地じんちがありました。また、四商にもありました。

B29が来ると高射砲を撃つのですが、高さが届かず、飛行機は悠々と飛んでいってしまいました。

昭和20年5月25日午後10時22分ごろ、B29二百数十機が来て、各地に焼夷爆弾落とし、このとき、練馬第二小学校の校庭の真ん中に9キロ爆弾が命中し、校舎が全焼して、コンクリートの土台と西のトイレだけが残りました。

その火の粉が移り、地元のお寺の円光院えんこういんが全焼してしまいました。

一時期は焼け残りの土台で勉強しました。その時の写真が今でも残っております。

当時の防空壕は、農業をしている家が多くありましたので、自分の土地に防空壕を掘り、各家にありました。中は暗くて、ろうそくやランプをつけて、子供た

ちは本などを読んでおとなしくしていました。

土地はあっても、防空壕をつくってくれるお父さんが出征していてつukれない方は、近所の防空壕に入れていただいていたいました。そのころのお父さんやお母さんは、畑仕事をしながら空襲に備え、子供らは、よく家のお手伝いをしていました。

私の家は農家でしたので、食べるものにはそれほど不自由はしませんでした、他の方は食べる物がなくてお腹を空かせていました。

農家でも、自分でつくったものでも勝手にできません。国からいくらぐらい出すようにと言われて、いろいろ供出させられ、残ったものを自分たちが食べていました。

食事は、お米に麦が入っていたり、さつまいもを入れたりしたご飯を食べました。野菜は煮たり、ゆでたり、てんぷらにしてよく食べました。お魚は、おじさんが自転車で売りに来てくれましたが、そのときだけで、今のようにいつもは食べられませんでした。

遊びは、男の子はベーゴマやけん玉、女の子は鬼ごっこ、石蹴り、お手玉、縄跳びなど、品物がなかったので、自分たちでつくったり、石を拾ったりして遊びました。

昭和20年8月15日。とても暑い日でした。

「天皇陛下の大切なお話があるのでラジオの前に集まるように」と言われて、近所の方も集まってきました。

陛下のお話が終わりましたが、私には何のことかわかりませんでした。

大人の方は泣いていました。後ほど、大人の方から、日本が負けたと言われました。

終戦となり、日本が勝つと思って頑張ってきたので、皆さん気が抜けてしまっ

て、仕事が手につかなかったようです。

学校の教科書は、軍国主義はいけないと悪いところを墨で黒く塗りました。

昭和20年9月1日、勉強するにも、学校が焼けて教室がなく、都立四商の空き教室をお借りして疎開から帰ってきた方たちと勉強しました。

その後、新しい教室ができて、5年生までは練馬第二小学校に戻りましたが、6年生2クラスだけ四商に残り、私たちは新校舎には入れませんでした。

それでも教室が足りないので、一クラスを半分に分けて、午前の部、午後の部と、二部制で授業を受けました。こんな時代でしたので、みな助け合って勉強していました。

食料事情が悪いので、生徒の体格をよくするために、と給食が出ました。

当時、練二小から四商まで給食を届けてくれた用務員さんには申し訳ありませんが、脱脂粉乳を飲んだことがなかったので、あまりおいしくなかったことが印象に残っています。

小学校時代には、いろいろなことがたくさんありましたが、昭和23年3月25日、全員小学校を卒業することができました。四商にはお世話になりました。とてもいい学校でした。

物のない時代で、練二小を背景にした写真には、ガラスに「練二」、「練二」と書いてありました。卒業当時は物資が不足していて、ガラスが盗まれることがあるため、書いてあったそうです。

ガラスが割れると、ガラスがなく、すぐに張り替えられなかったので、板を張ったり、新聞紙を張ったりしました。

おわりに、今回のお話をいただき、改めて昔のことを思い返すことができました。

楽しいこともありましたが、戦争という辛く悲しい体験はもう二度としたくあ

りません。

今の子供たちには、私が体験したような辛く悲しいことを味わわせることのないよう、また、この平和な時代が長く続きますことを願いながら、私の話を終わりにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

以上